読書ノート

2016.6.19/小林

コンプライアンス違反事例

1. 山崎豊子「運命の人 全4巻」（文藝春秋、2009年4月-6月）

* 外務省秘密漏えい事件

1. 西山太吉「沖縄密約－「情報犯罪」と日米同盟」（岩波新書、2007年5月）

* コンプライアンス問題、倫理問題を考える材料としてとてもよい。
* 政治家・官僚にとっては、これで沖縄が返還されたのだからよしとすべきなのか。「緊急避難」的な違法性阻却事由か。だが、国会をだまして返還協定/予算の承認を得たのは大問題。

1. 池井戸潤「空飛ぶタイヤ」（講談社文庫、単行本：2008年6月）

* 三菱自工のトラックタイヤ脱輪リコール隠し事件（横浜・母子死傷事故、その他）
* なぜ普通のサラリーマンがこんな大それた事をしたのか不思議でならない。

1. 小林秀之「裁かれる三菱自動車」（日本評論社、2005年6月）

* 未読

1. YouTube「ドラマ三菱自動車の真実2004 リコール隠し」

* 隠ぺい、内部告発、立ち入り調査、言いのがれ、追い詰められて、完落ちまでが再現ドラマ。

1. 吉野次郎「なぜ２人のﾄｯﾌﾟは自死を選んだのか-JR北海道 腐食の系譜」（日経BP、2014年4月）

* 未読

心理学関係

1. 岡本茂樹「反省させると犯罪者になります」（新潮新書、2013年5月）

* 立命館大教授、刑務所にて受刑者の更生支援
* 再犯防止のための更生教育はどうあるべきか
* 通常は、(1)強制的に反省を強いる、被害者の気持ちを考えさせる、(2)徹底的な私語禁止、所内規則の厳守、単純作業の毎日
* これでは、(1)「ほんね」を抑圧するだけ、心を開かない、根源的な問題が見えてこない、(2)他者とのコミュニケーションが身に付かない
* 面談で、加害者という立場の受刑者になぜ犯行におよんだかを語らせ、「なぜ？」を繰り返して質問していくと、根源的な問題が見えてくる（少年時代に受けた心の傷、など）

→自分で根源的な問題に気付けば、更生の可能性はより大きくなる

1. 加賀乙彦「悪魔のささやき」（集英社新書、2006年8月）

* 精神科医、小説家
* 随筆
* 麻原彰晃の精神鑑定をして責任能力なしとの意見書を書いた。

1. 細江達郎「知っておきたい　最新　犯罪心理学」（ナツメ社、2012年12月）

* 岩手大・岩手県立大名誉教授
* 一般人向け解説書
* 「集団浅慮」（group think、集団思考）：集団で意思決定すると個々の責任があいまいになるので倫理に外れたことをおこなう可能性がある。集団での意思決定は個々の攻撃性の発動に対する罪悪感をやわらげる。（心理実験）→下記の角山を参照。
* 苦痛を与える意思決定と犠牲者のあいだの時間的/空間的な距離が大きいと人は容易に意思決定する傾向にある。苦痛を感じているところを実際に見ていると意思決定はなかなかおこなわれない。（心理実験）

1. 藤岡淳子（編）「犯罪・非行の心理学」（有斐閣ﾌﾞｯｸｽ、2007年3月）

* 大阪大教授
* 教科書

1. 新田健一「組織とｴﾘｰﾄたちの犯罪－その社会心理学的考察」（朝日新聞社、2001年10月）

* 法務省法務技官、東京鑑別所々長、昭和女子大教授
* 学術的な研究論文、別途概要を報告予定。

1. 角山剛「企業不祥事の集団心理学的要因」（月刊人事労務2013年12月号）

* 東京未来大学教授
* 集団規範の成立：集団においてものごとを判断する場合、判断基準があいまいだと上司などの意見が判断基準（「準拠枠」）になってそこからはみ出さないような合意が形成され、みんなが同一の行動をとるようになってしまう（光点凝視の心理実験）→企業体質、企業風土
* 社会的手抜き：集団の中では誰かが指摘するからいいやと思い、結局誰も指摘せずに悪事がおこなわれてしまう。しかも集団の中の一人だと責任感が希薄になってしまい、もう誰も悪事を止めようとしなくなる。「自分だけ正論をいってほかの人からうとまれたら損だ」「正論をいっても誰も聞いてくれないだろう、無駄な努力はよそう」
* 集団浅慮：集団決定に沿って行動しようとする規範意識の強い集団では、意見を一致させることに意識が集中して批判的な討議をへることなく集団としての決定を急いでしまう傾向がある。そうなると、わずかな選択肢に注目し他の可能性を考慮しない、その選択肢から生じる不利な結果を無視する、専門家の助言をあおがない、その選択肢でうまくいかなかったときの代替案を考えないことにより有力メンバーの言った意見がそのまま通ってしまいやすい。
* 対策：①リーダーが明確な指針のもと具体的な指示を出すこと、②異論、反論を積極的に検討すること、③問題検討の視点を多角化すること。

倫理・道徳・宗教関係

1. 茂木健一郎・波頭亮「日本人の精神と資本主義の倫理」幻冬舎新書、2007年9月

* 茂木：脳科学者、波頭：経営コンサルタント
* 対談：日本にノブレス・オブリージュが根付いていない、腹を切れば許される文化は失敗から学ぶのがヘタ（将棋）、英国人はビジネスマンでもちゃんと教養を身につけていて会話がハイレベル、日本ではポップカルチャーは発達しているのにハイカルチャーが貧弱。
* 茂木/波頭の見解はこれとかさなる部分あり→高田康成（東大院教授）「キケロ－ヨーロッパの知的伝統」（岩波新書、1999年8月）：キケロなくして西洋思想は語れない、明治以降日本は西洋化されたが富国強兵の国家方針のもと西洋から法律や産業技術ばかり輸入したがギリシャ・ローマから連綿とつづく西洋思想を輸入しなかった（上澄みだけか）、特にローマ思想、特にキケロは最も重要な一人、欧米ではいまだに新たなキケロの伝記本が出版されている、日本は脱亜入欧で米国的大衆文化にのみ込まれていまだに入欧をはたしていない

1. 山折哲雄「さまよえる日本宗教」中公叢書、2004年11月

* 国際日本文化研究センター所長、宗教学、著書多数
* 1931年ｻﾝﾌﾗﾝｼｽｺ生まれ、東北大卒/同博士課程、駒沢/東北大助教授、国立歴民博教授、白鳳短大学長、京都造形大学院長
* 日本人の倫理と内部告発：近代西欧の人間観は「疑う人間」、人間性悪説からホップスの「万人に対する万人の闘争」が出てきた、性悪説にもとづいた社会を一つにまとめるには唯一絶対的な神（超越神）という存在が必要だった－混乱の中の絶対的な中心点、そういう神と人間が信仰で結ばれるとき神との約束という考えが出てきた、すなわち信仰という約束をやぶったら天罰を加える＝契約違反したら違約金を払えという契約の考え方と同じ→現在の西欧は契約社会vs日本社会には八百万の神がいて、そういう神に対する信仰からは約束・契約という考え方は出にくい、なぜなら神はどこにでもいる・無数にいる、人間と一対一の関係になりにくい、こういう社会をまとめるには性悪説ではまとまらない、ではどうするか、人間はそもそも信頼しうる存在だと思うしかなかった。こういう日本社会（組織・集団）において最悪のおこないは社会（組織・集団）の信頼を裏切ること、だから日本では内部告発がうまく機能しない。法律を作らざるをえなかった、作っても告発者に対して意に沿わない異動＝違法とまでは言えない異動がおこなわれたりしている。

1. 加藤尚武「現代を読み解く倫理学」丸善ライブラリー、平成8年6月

* 応用倫理学（生命倫理、環境倫理、職業倫理、医者の倫理、その他）
* 「コンプライアンスの倫理学」というのもあっていいのに
* 学校でのいじめの問題、人間の攻撃性をどうおさえるか。動物学的には優劣がはっきりすると攻撃性がおさえられる。勉強だけでなくスポーツや音楽、図工等々で優劣をつけるべき。
* 自立をしつけ過ぎるといじめられていることを隠すようになる。
* 日本人にはボランティアの倫理が欠けているところあり。米国の病院にはボランティア受付窓口があるのが普通。看護師が車いすを押す必要性はない。
* 日本人は相互性の倫理（保険など）が近代性と勘違いしている。一方的な献身の倫理に対して嫌悪感を感じるようだ。ボランティアをしましょうといわれると強制していなくても強制を感じてしまう。「わたしは誰にも臓器提供したくないが、そのかわり誰からも臓器提供を受けない」、これを近代的な個人主義と勘違いしている。

1. 加藤尚武「合意形成とルールの倫理学」丸善ライブラリー、平成14年11月

* 倫理というより正義を論じている（倫理は善悪の問題、正義はfairかunfairの問題か）
* インターネット投票が可能になったら間接民主制はどこまで正義なのか
* 刑罰の一つの目的が犯罪者の更生ならば犯罪者を一か所に集めて集団生活させるより善良な人たちの中で生活させたほうがよい（いまの刑務所は刑務所側の都合しか考えていないということか）、刑罰は正義だから許されているが、その刑罰が正義を実現していないということか。

1. 荻原道雄「企業倫理を考える　日本の伝統文化から経営実践まで」（八千代出版、2012年12月）

* 経営コンサルタント、70歳で大学院に入り東洋大で博士号取得
* 博士論文
* 二宮尊徳、渋沢栄一等々の倫理観が紹介されているが、それが現在の企業の倫理観とどのようにつながっているのか書かれていない。要は、企業での教育や社長のリーダーシップで従業員に企業倫理をたたき込めといっているだけか。後半は博士論文というより、実用書か。

1. 菱山 隆二「倫理・コンプライアンスとCSR」（経済法令研究会、2015年8月）

* 米国三菱石油社長等、経営コンサルタント
* ありきたりの実用書

1. 武田隆二編集・「現代社会における倫理・教育・コンプライアンス」（税務経理協会、2007年7月）

* この本の宣伝文句：人間のミスコンダクト（非倫理的な誤った行為）を防止するための根本には、倫理教育とコンプライアンスがなければならない。そのような観点から、ビジネス系の研究・教育者、実業界の識者が、「倫理」について多方面から検討し、問題提起を行った話題の書。
* 目次の以下のとおり。読む価値ありかも。

第１編　倫理概念と教育（基礎理論；倫理と「心の世界」）  
第２編　学術倫理と学会倫理（学術倫理；学会倫理）  
第３編　倫理教育の実践と現状（専門教育と倫理；学生指導と倫理）  
第４編　社会における倫理の実践（企業倫理；職業倫理；コンプライアンス）

1. 中央大学学術シンポジウム研究叢書編集委員会編集「現代社会における倫理の諸相」（中央大学出版部、2003年）

* 論文集
* 高橋 弘之「企業倫理を中心とした信頼される企業経営」は、単に企業倫理は大切だといっているだけ。

1. 池田燁子「日本人の職業倫理」（有斐閣、1990年5月）

* 文京女子大教授、宗教学
* キリスト教の根底にあるものはヘブライズム、労働は神に背いた罰としての苦役。これに対してプロテスタントは日常生活での仕事・義務の履行は神から与えられた使命と考えた、なぜなら社会は神が創造したものであって、その社会でやるべき仕事・義務をきちんとやることが神の意志に沿うから、つまり勤勉であれば救済される。
* 日本では、空海・最澄が仏教を中国から輸入し、修行して悟れ＝自分の中に仏があるのを知れ。これはなかなかむずかしい。鎌倉時代になって中国仏教は日本化されて現実的な在家成仏思想が出てきた、つまり日常生活の中で働いて仏の恩に報いなさい＝報恩。四つの恩あり、①父母の恩、②衆生の恩、③国王の恩、④三宝の恩。勤勉であれば成仏できるという思想になっていった。江戸時代になると戦がなくなって武士の存在意義が半分なくなった（軍事と行政）、そこで武士は欠落した半分を埋めるため精神性を高めていった、ではどういう方向性で精神性を高めたか、最上位の身分にある者としての倫理性を高めた、これが武士道。武士も職業なので武士道は職業倫理であり、プロテスタントの倫理に通じるもの。その一方で「武」に関する鍛錬が精神性と結びついていった、すなわち剣道、弓道、なぎなた道、柔道、空手道、など。
* 庶民の職業倫理の根っこは律令制のもとでの「座」（同業者組合）にあり、銀座、材木座、油座、など、座は天皇皇族や貴族、寺社に支配されていたので座に所属する商人はプライドをもっていた、と同時にその商業活動は宗教活動でもあった、倫理性が求められた。
* 西欧でも同じような状況、教会や修道院の建設にたずさわる職人は神のためのものを作っているというプライドをもっていた。

以上